

臨地実習指導者の語りを通じた老年看護についての一考察

The Gerontological Nursing from the Narrative Part of Coaches

石垣 範子 深江 久代
ISHIGAKI Noriko FUKAE Hisayo

I. はじめに

看護学教育は、学生が講義や演習などで学んだ知識・技術・態度を基に、対象者との関わりや援助の実際を通して対象理解を深め、看護実践能力を高めながら成長していくことを支えることが求められると考える。また学生が、看護実践能力を身につけ、看護観を深めていくには、経験豊かな臨地実習指導者による教育的な関わりや、看護実践をしている姿、経験に裏打ちされた言動が重要であることが言われており^{1)・2)}、臨地実習指導者との実習調整に日々模索しながら取り組んでいるところである。

実際の臨床現場では、学生が学内だけでは学び得ない状況依存的な「実践知」が多く潜んでおり、臨地実習指導者の体験などを取り出して看護の教材とする、看護の「教材化」が常々必要になると考えている。当短大での老年看護実習は、介護老人保健施設（以下「老健」とする。）で行っており、老健という生活の場の理解をはじめ、高齢者のこれまでの生活状況（ライフヒストリーを含む）や価値観、家族介護者の理解、多職種連携による協働など実に多様なことを学ばせて頂いている。また、老健という療養生活の場で看護を必要とする高齢者の理解については、臨地実習指導者による体験に基づいた気づきや学びの語り、援助の実際などを通して学生のみならず教員自身が気づかされるのが度々あった。こうしたことは、中西が述べる、“状況依存的で個別具体的体験”に基づく学習の構造³⁾の言語化が臨地実習指導者の強みであり、臨地実習指導者の語りや看護の「教材化」に繋がるのではないかと考えた。

これまでの臨地実習指導者に関する先行研究においては、臨地実習指導者の看護学生に対する関わり⁴⁾や指導上の困難¹⁾、指導が必要と判断する時の認識⁵⁾、看護師や看護実践の役割モデル^{6)・7)}に関する研究報告などはなされている。しかしながら、特に老年看護領域での臨地実習指導者に特化した研究は少なく、臨床で培われた「実践知」を持つ臨地実習指導者が施設における老年看護について語ったものは見当たらない。また、臨地実習指導者の臨床体験に基づいた語りの中にある「実践知」を知ることは、生活体験や看護体験の乏しい学生が「看護とは何か」について学ぶ機会となり、学生の看護観を深化させることにもつながるのではないかと考える。さらに、臨地実習指導者の語りや分析結果を手がかりとして、実習指導の効果を高めるための示唆が得られることにより、臨地実習指導者との連携・協力体制の再構築ができる点においても意義があると考えられる。

II. 研究目的

本研究は、老健の臨地実習指導者が考える“施設における老年看護”とは何かについて明らかに

することを目的とした。

III. 本研究での用語の定義

“施設における老年看護”：老健という生活の場の中で、臨地実習指導者が“大切にしたいと考える看護”、“学生に理解してもらいたいと考える看護”、“学生に取り組んでもらいたいと考える看護”とした。

IV. 研究方法

1. 研究期間

静岡県立大学研究倫理審査委員会での承認後（平成 26 年 9 月）～平成 27 年 12 月

2. 研究対象

本学看護学科 3 年生の老年看護実習を行なわせて頂いている介護老人保健施設の中で研究協力が得られた臨地実習指導者（看護師）

3. 研究データ収集方法

本学看護学科の老年看護実習終了後の平成 26 年 9 月および 12 月に研究者が介護老人保健施設に直接出向き、研究対象者に 1 回 40～60 分程度の半構造化面接法によるインタビューを行った。インタビュー内容（音声言語）は研究対象者の同意を得て IC レコーダーに録音した。インタビュー内容（音声言語）は、すべて研究対象者毎に逐語録化した。インタビュー項目は以下である。

《インタビュー項目》

- ① 臨地実習指導者が学生に学んで欲しいと考える老年看護とは何か
- ② どのような臨床体験や学びから学んで欲しいと考える老年看護が生まれたのか
- ③ どのような機会を捉えて学生に伝えたいと考えているのか
- ④ 老年看護を学ばせるために実習指導で困難と感じていることは何か
- ⑤ 学生の学びを深めるために看護教員と連携や調整をしたいと望んでいることは何か

尚、臨地実習指導者へのインタビュー項目①は“学生に学んで欲しいと考える老年看護とは何か”という表現としたが、実際のインタビュー時には、研究対象者に研究目的を理解して語りやすいように、用語の定義にある表現の追加説明を行った上でインタビューを実施した。

4. 研究データ分析方法

インタビュー内容（音声言語）は、すべて研究対象者毎に逐語録化した。また、本研究では特に、“施設における老年看護”と思われる重要な文節のみを取り上げ、質的帰納的に分析した。データ分析にあたり、信頼性と妥当性を高めるため、質的研究の研究経験を持つ指導者によるスーパービジョンを受けた。

5. 倫理的配慮

本研究は、静岡県立大学研究倫理審査委員会の承認を得てから実施した。また、研究対象者である臨地実習指導者への説明は、事前に実習施設の責任者に文書または口頭で行い、署名による承認が得られてから行った。臨地実習指導者への説明は、目的、方法、内容などについて口頭および文

書で行った。研究への参加は、臨地実習指導者の自由意志によるものであり、参加しないことによる不利益は一切なくいつでも辞退できること、個人を特定しないこと、研究目的以外に研究データを使用しないことを明示した。説明後、同意書への臨地実習指導者本人の署名を持って、研究参加の同意が得られたと判断した。研究データは、匿名性と守秘性を保証するため記号化して厳重に保管し、研究終了後の情報漏洩がないように配慮した。

V. 研究結果

1. 研究対象者の基本属性

本研究の研究対象者は5名で、対象者の看護師経験年数は20～40年、老健での看護師経験年数は5～15年であり、本学の老年看護実習では学生に直接指導を担当されていた。

2. 分析データの作成

インタビュー内容（音声言語）の録音したものを忠実に逐語記録に起こし、“施設での老年看護“に関連していると思われる発言内容を広く取り出し、素データ（生データ）とした。研究対象者5名のデータ化した素データ（生データ）の総数は86であった。研究対象者の発言内容にある重要な要素を出来る限り損なわないように、素データ（生データ）を短文化し、要約内容を作成した。さらに、要約内容を精読し、類似した要素に着目してグループ化のプロセスを踏み、28の前コード（X）、12のコード（Y）、7のサブカテゴリー（Z）と3段階のグループ化を試み、最後に5つのカテゴリーを生成した。以下、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは≪ ≫、コードは< >、前コードは[]とし、素データ（生データ）は『 』で記述した。

分析の結果、（表1）のとおり“施設における老年看護”として【老健の多角的な役割をふまえた看護】、【高齢者の状態把握と多職種との協働による看護】、【高齢者の理解に基づく看護】、【家族支援を通じた高齢者看護】、【個別的なその人らしい暮らしの探求】の5つのカテゴリーを表現した。

3. “施設における老年看護”について

1) 【老健の多角的な役割をふまえた看護】

上記のカテゴリーを導き出した代表的な素データ（生データ）は以下である。

『(C1002) 介護施設においては医療サービスと生活サービスが一体化している。病院と違って治療が優先ではなく、生活にもポイントを置いているところがあることを知ってもらえたらなあと思っています。』、『(C1016) (前略) 例えば食事が食べられない人がいる、私達だとミキサー食とか、何食とかいろいろ食事の中で考えるのだけれども。(中略) 私達の知らない情報を栄養士さんは持っている。だから、ただ食べられないからとここの食事だけに固着しないで、その中で介護保険の中で食事をどういうふうにするかそれが食費の中でちゃんと賄えるのか。(中略) やっぱり多職種との連携ってすごく大事だと思うんですね。』、『(C1005) 現在老健では、看取り介護も介護保険の中で認められているので、在宅復帰だけが目的ではなくて、その人がその人らしく、人生の最後を迎えることができるように。』などの語りが見られた。

これらの代表される素データ（生データ）の内容を類似性に基づき分類・整理し、以下のように表現した。< (Y006) 介護老人保健施設は病院の機能とは異なり限界があるが、医療サービスと生活サービスが一体化された看護・介護が生活にポイントを置いて提供され、在宅復帰支援に加えて看取りが行われようになっている。加えて、< (Y010) 老健では施設内の多職種、ス

(表1) 施設における老年看護

| カテゴリー | サブカテゴリー | コード |
|--------------------------------|---|---|
| 老健の多角的な役割をふまえた看護 | (Z003) 老健の生活の場における多角的な支援 | (Y006) 介護老人保健施設は病院の機能とは異なり限界があるが、医療サービスと生活サービスが一体化された看護・介護が生活にポイントを置いて提供され、在宅復帰支援に加えて看取りが行われていること |
| | | (Y010) 介護老人保健施設は施設内の多職種、スタッフ皆が連携・協力し多角的な視点で高齢者の援助方法を考えることが必要な場であること |
| 高齢者の状態把握と多職種との協働による看護 | (Z004) 高齢者の状態把握と多職種連携に基づいた看護・介護の調整役割 | (Y008) 介護老人保健施設の看護師は高齢者の状態変化をいち早く捉え、多職種が連携して看護・介護ができるように調整すること |
| 高齢者の理解に基づく看護 | (Z002) 日常生活での関わりを通じた高齢者の全体像や状態変化についての気づきに基づく看護 | (Y004) 高齢者のこれまでの生活背景や生活史、今現在の日常生活全般を含めたその人となりを全体的に捉えること |
| | | (Y005) 高齢者にじっくりと関わってニーズを引き出ししたり、異常や状態の変化に気づいて必要な看護を見出すこと |
| | | (Y012) 援助者自身が会話の引き出しを増やし、相手のことを思いながら会話や関わりの工夫をする中で関係性が築かれ、高齢者の理解、看護につながること |
| 家族支援を通じた高齢者看護 | (Z001) 高齢者家族の思いや意向を把握し高齢者とその家族との援助関係を構築した上での高齢者看護 | (Y002) 高齢者のその人らしい暮らしのあり方を支えるために御家族との関係性を大切に一緒に考えること |
| | | (Y011) 認知症高齢者家族や終末期にある高齢者家族のこれまでの思いや意向を把握し、高齢者と家族を含めてでき得る看護を行うこと |
| 個別的なその人らしい生活支援の探求 | (Z005) 高齢者の健康維持と自立に向けた支援 | (Y009) 高齢者の生活において安易な行動制限をするのではなく、家族の意向を確認した上で高齢者の出来ることを見極め、なるべく御自身でやって頂けるように見守ることが健康の維持や自立支援となること |
| | (Z006) 高齢者の居心地のよい生きがいのある生活の場の支援 | (Y001) 慣れない施設生活の場の中にあっても高齢者にとって楽しく気持ちよいと思ってもらえるような自然でさりげない関わりの工夫をすること |
| | | (Y003) 高齢者がゆとりや楽しみを持ち、生きがいのあるその人らしい生活を送るための支援を探求し実践すること |
| (Z007) 高齢者の個別の健康課題に臨機応変に対応した支援 | (Y007) 高齢者や認知症の方の何らかの健康障害や生活障害の原因を明らかにし、穏やかな生活が送れるように臨機応変に個別の対応の仕方を工夫すること | |

スタッフ皆が連携・協力し、多角的な視点で高齢者の援助方法を考えることが必要な場>となっており、≪(Z003) 老健の生活の場における多角的な支援≫が益々求められるようになってきている。介護保険制度の導入当初からみると、老健の期待される役割が多様化してきており、最終のカテゴリーを【老健の多角的な役割をふまえた看護】と表現した。

2) 【高齢者の状態把握と多職種との協働による看護】

上記のカテゴリーを導き出した代表的な素データ（生データ）は以下である。

『(C1003) 看護師は、(中略) その中で最も患者さん（高齢者）に寄り添っているところにいるので、中心的存在としてトータル的に一番状態を把握しやすい位置にあるので。』、『(C1008) 医師が常にいるわけではないので、状態の変化をやはり看護師がいち早くキャッチしていかなければいけないというところが大変。(後略)』、『(C1004) 看護師は、その中で病院と同じであるけれども、(中略) 多職種との連携が取れるように配慮していく必要性が強いのかなと思います。』などの語りが見られた。

これらの代表される素データ（生データ）の内容を類似性に基づき分類・整理し、以下のように表現した。[(X017) 老健の看護師は、高齢者の状態を全体的に把握しやすい位置にあり、いち早く状態変化を見つけることが必要] であり、[(X012) (前略) 多職種が協力して看護・介護ができるように、高齢者の身近な存在である看護師が配慮していくことが必要] であるため、≪(Z004) 高齢者の状態把握と多職種連携に基づいた看護・介護の調整役割≫が求められる。よって、最終のカテゴリーを【高齢者の状態把握と多職種との協働による看護】と表現した。

3) 【高齢者の理解に基づく看護】

上記のカテゴリーを導き出した代表的な素データ（生データ）は以下である。

『(E1004) (前略) この人の言っている意味が分からないとか、この人は言語障害があるんだとか、そういうことだけじゃなくて、この人が伝えたいことは何なんだろうかという思いで看護をしていくわけだから。それには、この人が育った環境がどんな環境で育って、どういう人なのかということをお話する程度イメージしてお話を聞くというと、やっぱり広がり方が違うんじゃないのかなというのがあります。だから、思い込みではなく、環境を知って欲しい。育った環境、先程言った暮らした環境、どんな人と関わり合ったのかということを知って欲しいなど。(後略)』、『(A1010) (前略) やっぱり触ってみなければわからない、その人の皮膚だったり、かさかさしてたりとか、からだの変形していたり、背中が曲がっているような方がいるんだけど、そういうのは実際に触ってみないと分からないことだと思うので、いろいろ触りながらこれだけ曲がっていたらやっぱりいろんなところにひずみも出てきて、立つのも大変だろうなというのを感じるとか、これだけぐにゃっとしていたら他にも骨折しやすいところがあるんだろうなとか思ったり、これだけ皮膚が弱いんだからちょっとの力を入れても内出血ができるよとか皮剥けができるよとか。そういうのを思いながら最後にクリームを塗って、保湿をすることが必要だよねと、自分の手で感じて欲しい。(後略)』、『(B1008) 日常の生活の中での援助になっていますので、施設の中は。その中でちょっといつもと違うところの変化にやはり気づいてもらいたいというところがありますかね。なかなか短い期間ですからねえ。でもその中でもきっと、この人が昨日と今日はちょっとここが違うなといった変化はきっと学生でも気づくことができると思うので、そこら辺は大切に気づきを育ててもらいたいなと思いますけど。』、『(D1003) お年寄りというのは、普通に話をして、普通に返事をしてくれる

人もいますけれど、性格上年を重ねるごとにちょっと頑固になったりだとか、コミュニケーションのところで特に認知症が入ってくるとうまく関わりができなくなるので。やっぱり自分がその人に対する接し方でうまく人間関係をつくらないと。特に認知症の方は、人のことが見えないように見えているじゃないですか。本当に信頼関係をつくる努力をしないと、ほんの一瞬で崩れてしまう。すぐに忘れてしまうかもしれないけれども、やっぱり嫌な人というのは凄く印象に残るので、その関わり方をうまくしないと、認知症の高齢者との関係性というのは難しくなっちゃうのかなと思います。』などの語りが見られた。

これらの代表される素データ（生データ）の内容を類似性に基づき分類・整理し、以下のように表現した。老年看護において大事なことは、≪Z002) 日常生活での関わりを通じた高齢者の全体像や状態の変化についての気づきに基づく看護≫である。そのため、< (Y012) 援助者自身が会話の引き出しを増やし、相手のことを思いながら会話や関わり工夫をする中で関係性が築かれ、高齢者の理解、看護につながることをふまえ、< (Y004) 高齢者のこれまでの生活背景や生活史、今現在の日常生活全般を含めたその人となりを全体的に捉え>、< (Y005) 高齢者にじっくりと関わってニーズを引き出し、異常や状態の変化に気づいて必要な看護を見出すこと>が重要となる。よって、最終のカテゴリーを【高齢者の理解に基づく看護】と表現した。

4) 【家族支援を通じた高齢者看護】

上記のカテゴリーを導き出した代表的な素データ（生データ）は以下である。

『(B1019) 今、やはり長く入所しちゃうと、もうなかなかやっぱりお家の中の環境がもうそういう状況にならないですよ。ですので、お家の人がそういう少しでもお家に帰そうという気持ちがあるうちに話を進めていくみたい。そうしていくと、お家に帰ってからの援助もこういうものがあるんだよということの情報を流していくと、お家の人も受け入れられるという状況になりますので、そういう気持ちがあるうちということなので。(中略) 今帰る方向の目標に向けて頑張っているんで、一つの方向の目標に向かうと、リハビリのやり方も変わってきますし、職員も本人の気持ちも変わるし、お家の方の気持ちも変わるので。やはりチャンスを逃がさないって言うんですか、帰るとい。はじめの入所の時に帰る希望があるならば、目指していく。そのうちにお家の方の希望が変わっていつてしまうことがあるかもしれませんが、それをうまくいいうころですかね。(後略)』、『(C1006) 現在老健では、(中略) その人がその人らしく、人生の最後を迎えることができるように、やっぱり御家族との関係が重要。結構病院と違って、家族の占める割合が非常に強いのでそこら辺が大変かなと思います。』、『(C1014) 私達のお世話も家族の思いが結構影響されるので、やっぱり御家族の希望。本人が段々寝たきりになってくると、本人がこう意思表示ができなくなってくると、今度は御家族の希望が大きくなっていくので、とにかく御家族を含めての援助が必要と思います。』、『(D1018) 家族の背景によっても、その話の内容というか、関わり方とかが変わってきますものね、学生も、もちろん私たちも。(中略) 他の家族の人の体調が悪くなったからという人もいるし、家族の中でもめてお母さんと息子さんがもめてどうしようもないから、こういうところに入ると。それぞれの背景が分かればもっと問題点と言うか、関わり方というののもっと見やすいというか、立てやすいのかもしれないですけどもね、そういうところは。まあ、そういう、ここに入る人たちは、そういう問題点を抱えて入っているということを知ってもらって、もちろん家族もここに入れるにあたってのいろいろな葛藤があるということが知ってもらえればいいのかと、くみ取れればね。』などの語りが見られた。

これらの代表される素データ（生データ）の内容を類似性に基づき分類・整理し、以下のように表現した。老健では、〈（Y002）高齢者のその人らしい暮らしのあり方を支えるために御家族との関係性を大切に一緒に考えること〉が必要である。また、〈（Y011）認知症高齢者家族や終末期にある高齢者家族のこれまでの思いや意向を把握し、高齢者と家族を含めて出来得る看護を行うこと〉を大事にしたいと考えており、〈（Z001）高齢者家族の思いや意向を把握し、高齢者とその家族との援助関係を構築した上での高齢者看護〉が必要となってくる。よって、最終のカテゴリーを【家族支援を通じた高齢者看護】と表現した。

5) 【個別的なその人らしい生活支援の探求】

上記のカテゴリーを導き出した代表的な素データ（生データ）は以下である。

『(C1012) 御家族と住み慣れた自宅を離れ、御家族とは死別されて一人暮らしという方もいらっしゃると思いますので、そういう心の中の寂しさを感じ取って、その人の生きてきた歴史があることを重んじて接していってもらえればと思います。』、『(C1011) 認知症の方だと、ともすると大きな声を出されたり、暴力的になられたりしていますが、やっぱり一瞬引いてしまいますよね、誰も大きな声を出されたり、暴力的になると。でも怖がらず優しく寄り添って声をかけていくと、本人も落ちついて、それなりに本人が興奮する理由があると思うので、そこを捉えてあげて、ただ暴力だけに目が行ってしまわないように。お互いの相互作用だと思うので、優しく接していくと段々と落ちついてくる。それが認知症の人の穏やかな生活に繋がっていくと思うので、そこら辺気をつけながらやっていってもらえたらと思います。』、『(C1022) クラブ活動というのも、生け花クラブ、季節の花、お料理、リハビリ、手作りおやつを楽しむ会も、季節のもの。本当に外に出られない分、季節を感じないですよ、冷暖房完備なので。他施設みたいに御家族を呼んで大々的にやるのもいいけれど、でもフロアの中でやれば全員参加、御利用者ができるので、地味だけでも、いいよねって。みんなが味わえるということですよ。季節ですよ。やっぱり大事にするのはね。(後略)』、『(B1007) 毎日昨日はここが出来たのに、今日はできないんだというところの理解、頭の切り替えというのかな。若い人はできたことがずっと続けられるかもしれないけれど、御老人は毎日変わっていくということ、変化ですかね、でもやっぱりできることはそのまま維持してもらいたいのので、できることを見極めていく、できることは自分でなるべく行ってもらうことの大切さですかね。』、『(D1007) もちろん生活リハビリ、自分でできることはやってもらう、時間に追われていると、どうしても私たちが手伝ってしまう部分があるんですけども、車椅子徘徊をしてもこれもリハビリである。だとしたら、私たちがしっかり見守りをして、事故がないように動けるうちは、やれるような見守りの仕方というのもあるだろうし、できることをすごいいいことだと思ってあげないと。「動く」、「ダメ」というふうに、うちの職員もやっぱり思っちゃう、「危ない」と。できるところはやっぱりやらせてあげないと、というところがありますよね。』、『(B1006) でも日々その状態も変わるんですよ。今日は自分でご飯を食べられたけれど、明日は食べられないということが御老人には多いことですので、それに対応した、臨機応変な援助ということになってくるんですかね。(後略)』、『(D1005) (前略) 私たちは、その人の不穏になる原因というのをやっぱり考えないといけない。やたらめったら薬に頼っちゃう。薬をあげればいいのではなくて、薬を飲む前の問題点をやっぱり解決してあげられるような努力をしないといけないし、夜眠れなければ、それなりに日中の活動の時間を増やすとか、まめな関わり方で眠れるようにもっていく努力をしなければいけないなど。もっと関わりを持つようにして、それでもだめなら薬という対応、また違った治

療を考えられる。だからまずは何が原因か探るようにしていかなければ、それで解決できれば問題は無くなるし。やたら薬というのは使っちゃいけない。できるだけ減らす努力をしなければいけないかなと思うんですけどもね。(後略)』などの語りが見られた。

これらの代表される素データ(生データ)の内容を類似性に基づき分類・整理し、以下のように表現した。老健でのその人らしい生活を支えるためには、≪(Z006)高齢者の居心地のよい生きがいのある生活の場における支援≫、≪(Z005)高齢者の健康維持と自立に向けた支援≫、≪(Z007)高齢者の個別の健康課題に臨機応変に対応した支援≫が求められる。居心地のよい生きがいのある生活の場の支援では、<(Y001)慣れない施設生活の場の中にあっても(中略)自然でさりげない関わりの工夫をすること>や、<(Y003)高齢者がゆとりや楽しみを持ち、生きがいのあるその人らしい生活を送るための支援を探求し実践すること>が大事である。また健康維持と自立に向けた支援では、<(Y009)高齢者の生活において安易な行動制限をするのではなく、家族の意向を確認した上で高齢者のできることを見極め、なるべく御自身でやって頂けるように見守ること(後略)>が重要である。さらに個別の健康課題に対応していくためには、<(Y007)高齢者や認知症の方の何らかの健康障害や生活障害の原因を明らかにし、穏やかな生活が送れるように臨機応変に個別的な対応の仕方を工夫すること>が必要とされ、最終の κατηγοリーを【個別的なその人らしい生活支援の探求】と表現した。

VI. 考察

本研究は、老健の臨地実習指導者が、“施設における老年看護”についてどのように認識しているかを明らかにするためにインタビューを行い、質的帰納的に分析を行った。その結果、【老健の多角的な役割をふまえた看護】、【高齢者の状態把握と多職種との協働による看護】、【高齢者の理解に基づく看護】、【家族支援を通じた高齢者看護】、【個別的なその人らしい生活支援の探求】の5つのカテゴリーを見出した。

以下に老健の役割と看護師の位置づけ、個別的なその人らしい生活支援の探求、臨地実習指導者の語りの意味、実習指導に関する教育的な示唆の4つの視点から考察をする。

1. 老健の役割と看護師の位置づけについて

老健は、治療が優先となる病院とは異なり、高齢者に極力起きて食事を食べて頂く、それもベッド上ではなく座った姿勢で食事を食べて頂くなど、その人なりの日常生活を再び取り戻すための援助、生活の場にポイントを置いた看護・介護が行われている。つまり老健では、高齢者の病気や障害の有無に関わらず、日々の習慣的な営みをさりげなく整え、人間らしい暮らしを最後まで尊重することを大事にしていると言える。援助の実際においては、老健の本来の役割である在宅復帰が果たせないケースもあるが、施設内全体で他部門や多職種との連携を通じて生活援助や看取りを行うなど、多角的な視点で高齢者援助の工夫ができるといった強みがあることが考えられる。こうした【老健の多角的な役割をふまえた看護】が基盤となり、≪高齢者の状態把握と多職種連携に基づいた看護・介護の調整役割≫を中心となって担うことが、大事な【高齢者の状態把握と多職種との協働による看護】に繋がっていると考えられる。また看護師は、常々【高齢者の理解に基づく看護】が必要とされ、≪日常生活での関わりを通じた高齢者の全体像や状態変化についての気づきに基づく看護≫を実践するためのコミュニケーション能力、対人関係能力、観察力、アセスメント能力を高めながら、対象に必要な個別性のある看護を見出すことが重要であると考えられる。

2. 個別的なその人らしい生活支援の探求について

老健に入所される高齢者と家族には、施設への入所以前から現在に至るまでに様々な葛藤がある上に、気疲れや漠然とした不安を抱えながらの生活の中で、今後の方針や終末期の過ごし方を決定しなければならない状況がある。そのため、こうした高齢者と家族の個別の背景を踏まえながら援助関係を構築し、家族の意向を尊重しつつ高齢者一人一人のその人らしい生活が実現できるように、“共に考え”、高齢者と家族を“共に支える”看護、【家族支援を通じた高齢者看護】が必要になると考える。

また、【個別的なその人らしい生活支援の探求】の一つとして、≪高齢者の居心地のよい生きがいのある生活の場の支援≫がある。老健では、季節ごとの行事や行事食、レクリエーションなど、〔高齢者が施設の中においてもこれまでの生活習慣を取り入れることができたり、活動を通じて季節感を感じ、生活の中に何らかの楽しみやゆとりのある機会を持てることが大事〕にされており、生活の場での様々な工夫がなされている。加えて、〔高齢者に援助をする際に、個々の気持ちや体調、反応を確かめながら、生活の場が楽しく気持ちよいと思ってもらえるような気遣いや優しい言葉かけなどの関わり方の工夫〕があり、個別的な関わり方のあり方が【個別的なその人らしい生活支援の探求】にも繋がっていると考える。

ある臨地実習指導者のインタビューの中に、『(B1017) (前略) 高齢者さんの特性を見た時の昨日と変わらない生活を送れることの素晴らしさ、大切さ、それに意味があるんだよというところがまだ実感として湧かないのかもしれないですね。(後略)』という語りがあった。老年看護実習の実際では、学生が高齢者の加齢や疾患にともなう身体的・精神的・社会的影響やセルフケア能力を総合的にアセスメントし、高齢者ができるだけ自立した生活が過ごせるように看護展開をさせている。病院実習を体験した多くの学生は、治療優先の思考過程で学んでいるため、“高齢者さんに良くなってもらいたい”、“高齢者さんの機能の回復や向上を目指したい”と発言する傾向があり、老健の実習において“何が看護なのかがわかりにくい”と戸惑う様子が見受けられることがあった。しかしながら、高齢者の加齢にともなう機能低下は、ごく自然な生理的な変化の現れであり、今の健康状態や生活機能が維持でき、日々変わりなく生活できる≪(高齢者の)健康維持と自立に向けた支援≫が【個別的なその人らしい生活支援の探求】に繋がるといった看護の意味を肯定的に捉えることができれば、学生の看護観が変わってくるのではないかと考える。また、≪高齢者の健康維持と自立に向けた支援≫の探求では、高齢者個々の<(前略)健康障害や生活障害の原因を明らかにし、穏やかな生活を送れるように臨機応変に個別の対応の仕方を工夫すること>が必要であり、看護師による観察力やアセスメント能力如何が【個別的なその人らしい生活支援の探求】に影響を及ぼすことが考えられ、看護師の実践能力が求められる。

3. 臨地実習指導者の語りの意味について

『(C1021) 一月一日は毎年のことなんだけれども、リースの衣類の人は全部おニューの衣類にするんです。昔の人って、一月一日はきれいな服を着るっていう習慣があった。なので、一月一日に全員新しい衣類にできるように。暮れの30日か31日にお風呂をやって、全員真新しい洋服に換える。(中略) 一月一日には着古した服ではなくて新しい服に換えて、「新年新しい気持ちで迎えてくださいね。」ってやっているんです。(後略)』という臨地実習指導者の語りがあった。こうした“生活の場における心遣い”の看護は、日頃私達が学んでいる教科書には“一般的な”看護としては述べられていないかもしれない。しかしながら、私達の暮らしの中にあるごくありふれた物や日頃忘

れがちな昔ながらの文化や風習、個々の生活習慣といったものを、施設の生活の中にさりげなくかつ大切に取り入れることにより、高齢者は大事にされていると感じ癒しになるのではないだろうか。また、看護師自身が人としての年齢や経験を重ね様々な役割を担って生活の知恵を身につけ、加齢にともなう身体的、心理的、社会的影響の実際を体験することで高齢者の理解が今まで以上に深まり、若い頃とは違った高齢者に対する共感や新たな看護観が生まれるのではないかと考える。高齢者の体験してきた文化や風習といったものを全く知らない学生は、“生活の場における心遣い”について理解し、看護として生活の場に取り入れることは難しいのかもしれない。しかしながら、高齢者がどのような生活環境のもとで生まれ育ち、何を大切に生活してきたのかを把握した上で看護することの意味や、その必要性について理解することは、個別性を踏まえた看護とは何かを学ぶことに繋がると考える。よって、生活の場における看護の意味が深められるように、まず学生の身近な存在である祖父母や両親といった家族の暮らしと関連づけて生活そのものを知ることが大事であると考え。そして、臨地実習指導者の語りは、自己の様々な生活体験や看護師としての経験が基盤となって看護観が深化する可能性について示唆しているものと考え。

4. 実習指導に関する教育的な示唆について

学生が、療養環境や高齢者に配慮しつつ信頼関係を築くこと、また主体的にコミュニケーションを行い、日常生活援助を通して対象の全体像を理解することは、老年看護実習に特化した課題であるとは言い難い。しかしながら、老健での実習初期において、高齢者に同意を得ながら意図的に情報を引き出すことや、認知症にともなう高齢者の行動や発言に対し、学生が戸惑うこと⁸⁾が明らかにされており、学生個別の困難さを見極め、高齢者との関係作りを支えることが施設における高齢者看護の理解に必要であると考え。

ある臨地実習指導者のインタビューの中で、『(A1005) 高齢者にはあなたはここにいる意味があるんだよ。がんばってきたよね。ということとその人に伝えてもらわないともったいないという気がして。(中略) 実際に病院で働いていたことがあった人(高齢者)が、若い人に直接伝えたいこと、いろいろとすごく考えながら話してましたよね。そういう感じが生きがかったことを蘇らせてくれて、今またこういうように話をすることができたこと、伝えられたことが嬉しかったということだったんですよ。話をした後も。そういうのを見る中で、その人には何が残っているのか、何が引き出せる機会になるかなということ、そんなのが見つけられればいいなと思いつつながら。』という語りがあった。この臨地実習指導者は、寝たきりで全介助の状態にある高齢者の残されている力に気づき、高齢者自身にこれまでの生活体験を直接学生に向けて語って頂けるように働きかけていた。このことは、高齢者本人による語りを通じて、学生がその方の生き様を学ばせて頂く機会になったばかりではなく、高齢者が自ら語り学生と触れ合えたことにより、“今ここにいる意味”や“これまでの頑張り”を再確認して頂いた、さりげない自然な働きかけができていた場面でもあったと考える。病院における看護学実習では、治療を優先とした看護上の問題に着眼する傾向にあるため、学生は老健での実習においても高齢者の健康課題やリスク要因に捉われてしまい、対象の健康的な側面や強みを見落としてしまう傾向がみられる。しかしながら、老健という療養生活の場においては、高齢者をより全体的に理解し、残されている能力や魅力を引き出しながら最後までその人らしい暮らしができるように支援することが期待されると考える。よって、学生に対してやみくもに高齢者のその人となりや説明し、安易に応えるのではなく、学生自らが考える機会となるように場の工夫が必要である。またその一方で、学生が限られた実習期間の中で、対象の背景を理解し、意図

的かつ個別性を踏まえた看護の実践をすることは難しいとも考えられる。そのため、臨地実習指導者から、高齢者や家族のライフヒストリーや入所に至るまでのエピソードに関する情報を頂き、学生が高齢者の理解をより深め、高齢者と家族の価値観や意向を尊重した看護実践のためのヒントを掴むことができるように、臨地実習指導者と連携、協力をしていくことが必要であると考え。

次いで学生は、高齢者には加齢にともなう様々な機能の変化や低下があることを事前に学んではいるが、その現れには個性や日内変動などがあること、状況に応じた看護援助の工夫が必要になることを実際の看護体験を通してはじめて学ぶことになる。また臨床経験の乏しい学生が、自分の観察した内容の意味づけや、行った看護を言語化し、評価することは非常に難しいと考える。一方老健の看護師は、モニターなどの診断機器がない中でも五感や観察行為を通じて高齢者の変化や訴えを直感的に看取る力が必要であるとされ⁹⁾、経験に裏打ちされた根拠に基づく看護実践が行われている。川島は著書の中で、一人の看護師が語る一つのナラティブが一回限りのものであっても、そこから引き出される学びが自己の他の看護場面に適用できるだけでなく、「経験を語る」ことの積み重ねが知識の普遍化に繋がること¹⁰⁾を述べている。よって、学生が実際の高齢者に直に手で触れて見て感じ取ることによる気づきや、臨地実習指導者の語りの中からの学びが引き出せるように、また学生の行った看護や経験の意味づけ¹¹⁾ができるように助言や発問などを通して支えることが必要であると考えている。

VII. 研究の限界

本研究は、A 県内にある老健 4 施設のうち、臨地実習指導者 5 名のインタビュー内容について質的帰納的に分析したものである。研究結果を一般化するには研究対象者数が少なく、看護師としての経験や場による違い、施設看護師としての経験の差による影響も考えられる。よって、老健の臨地実習指導者の一般的な認識の傾向を示したものであるかについては今後の検討が必要である。

VIII. 結論

本研究は、老健の臨地実習指導者が考える“施設における老年看護”とは何かについて明らかにすることを目的とし、インタビュー内容から“施設における老年看護”として重要と思われる文節を取り出し、質的帰納的に分析を行なった。その結果、【老健の多角的な役割をふまえた看護】、【高齢者の状態把握と多職種との協働による看護】、【高齢者の理解に基づく看護】、【家族支援を通じた高齢者看護】、【個別的なその人らしい生活支援の探求】の 5 つのカテゴリーで表現された。

謝辞

本研究の実施にあたり、貴重な看護体験や看護観についてインタビューをさせて頂きました臨地実習指導者の皆様に深く感謝申し上げます。また、これまで多くの看護学生の御指導にあたって下さいました臨地実習指導者をはじめスタッフの皆様方に心より感謝申し上げます。

引用文献

1. 細田泰子 山口明子 研究報告 実習指導者の看護学実習における指導上の困難とその関連要因 日本看護研究学会 Vol. 27 No.2 p 67 - 75 2004
2. 山田聡子 太田勝正 臨地実習指導者の役割 第 2 回 看護教育専門家から臨地実習指導者への役割期待 実習受け入れ準備と学生指導における役割 看護教育 Vol. 54 No.8 p

756 - 760 2013

3. 中西睦子 臨床教育論 体験からことばへ ゆみる出版 1983
4. 阪本みどり 田邊和代ほか 看護学実習における臨床指導者の教授行動・教授態度 看護学生に対する援助的関わり 日本看護学教育学会誌 10(2) p105 2000
5. 植田 彩 原著 指導が必要と判断するときの指導者の認識に関する研究 基礎看護実習における指導過程を分析対象として 千葉看護学会誌 Vol. 13 No.1 p 111 - 118 2007
6. 渡部菜穂子 一戸とも子 研究報告 看護学実習における臨地実習指導者の「看護実践の役割モデル」の認識 弘前学院大学看護紀要 第6巻 p1 - 10 2011
7. 香西尚実 湯谷美枝子 臨地実習指導者が認識する看護師としての役割モデル行動 香川県立保健医療大学雑誌 第2巻 p65 - 72 2011
8. 石垣範子 深江久代 今福恵子 宮前典子 介護老人保健施設での老年看護実習における学生の困難感について 静岡県立大学短期大学部研究紀要 第26号 p43 - 55 2012
9. 山田由紀 介護老人保健施設における看護師の経験知から導き出された看護実践能力の特性 立命館人間科学研究 第31号 p19 - 34 2015
10. 川島みどり 看護を語ることの意味 “ナラティブ” に生きて 看護の科学社 p10-11 2007
11. 藤岡完治 屋宜譜美子 看護教育講座6 看護教員と臨地実習指導者 医学書院 2004

参考文献

1. 堀内ふき 大淵律子 諏訪さゆり ナーシング・グラフィカ 老年看護② 高齢者看護の実践 メディカ出版 2005
2. 北素子 谷津裕子 質的研究の実践と評価のためのサブストラクション 医学書院 2009

キーワード：老年看護 介護老人保健施設 臨地実習指導者

(2015年12月28日 受理)